

36 日本における養生論の引用書目の 変遷

瀧澤 利行

養生論は、洋の東西を問わず、医学の体系が成立した民族においては等しく何らかの形態をとって著されてきた。日本における養生論は、中国文化の養生思想や道教医学などの影響のもとに、その成立の当初は疾病治療の一環として、後には自己健康管理論として、生活形成・人間形成や文化受容・文化形成などの諸側面を有しながら、明治後期まで著されてきた。

日本における養生論は、その成立期には中国養生論や医学諸文献からの撰述を主たる方法として著述された。佚書とされている物部廣泉『攝養要訣』(八二七年)、深根輔仁『養生鈔』(八七七年)、和氣紀業『延壽明経』(刊年不詳)などの古代養生論も、現在その内容を閲しうる丹波康頼『醫心方』巻二十六、巻二十七(九八四年)、釋蓮基『長

生療養方』(一一八四年)、丹波行長『衛生秘要鈔』(一一八八年)、丹波嗣長『遐年要鈔』(刊行不詳)、竹田昭慶『延壽類要』(一四五六年)、などの中世期養生論の内容から考量すると、いずれも撰述によつていたと思われる。

近世期にいたると養生論も次第に撰述形式から論述形式に移行してくる。にもかかわらず、近世期以降の養生論においても、文化・文政・天保期にいたるまで、古代・中世養生論と共通する中国医書や中国養生論が引用されている。貝原益軒『養生訓』(一七一三年)においても夥しい数に上る中国医書や養生論が引用されていることをみても、日本の養生論は、その最盛記といえる時期においてもなおその内容の基準ないし規範を中国養生論やその関連医書にもとめていたとしうる。

このことは、次の二論点を提起する。すなわち、その一つは、日本の養生論における引用書目を縦断的に把握していくことにより、日本の養生論の形成が中国養生文化やその周辺文化をどのような系統性と内容的関心にもとづいてなされたかを明らかにしうる点である。いま一点は、各時代区分ごとにその時期に著された養生論にお

ける引用書目を横断的に把握することにより、各時代区分ごとにいかなる種類の文献が引用頻度が高かったかを分析することを通じて、各時代の養生思想の構成要素を明らかにし、養生思想の全体像をより明確にしうる点である。この二点はいずれも、日本における養生論がいかなる思想的影響のもとで成立し、展開したかを異文化受容と同化の観点から考察することにほかならない。

本研究では、以上のような課題意識に立つて、前述の二つの論点のうち、主として後者の観点の下で、各時代区分ごとの主要養生論における引用書目の種類および引用頻度を把握し、その傾向に検討を加えることにより、日本における養生論の成立と展開の文献的基盤を明らかにすることを試みる。

その結果の詳細は、発表時に提示することになるが、現在までにおこなった検討によって明らかになった点を以下に示す。なお、日本の養生論における引用は、養生論が非専門家を対象に著されているために、引用箇所の記述は必ずしも正確ではなく、また人名のみで書目の記載がない場合も多い。

全時代を通じて頻繁に引用された文献は、医書では『黄帝内經素問』『同 靈樞』『同 大素』『備急千金要方』『諸病源候論』などであり、医書以外では『老子』『莊子』『呂子春秋』などである。また時代別にみると、古代中世においては『養生要集』『養生延命録』『抱朴子』などがよく引用されている。近世にいたると『遵生八牋』『蘇東坡の一連の著作』『壽養叢書』『壽親養老書』『醫學入門』『達生録』などが多く引用されている。

また、近世期にはそれまでは少数にとどまっていた医書以外の思想書、歴史書の類からの引用が頻繁になってくる。この点は、医論から生活形成・人間形成論への移行という養生論自体の文化的機能の変容を示唆している。

(茨城大学教育学部公衆衛生学研究室)